

研究ノート

集落における女性の組織 ― 観音講と念仏講 ―
― 宮城県石巻市北上町を事例として ―

武 中 桂^{*1}, 庄 司 知恵子^{*2}

Social Organizations for Women in the Hamlet (mura)
― “KANNON-KOU” and “NENBUTSU-KOU” ―
a Case study of Kitakami-cho, Miyagi Pref., JAPAN

TAKENAKA Katsura, SHOJI Chieko

*1 元神戸女学院大学特任助教
北海道大学大学院 文学研究科 専門研究員
連絡先：武中 桂 muchacha@nji.or.jp

*2 岩手県立大学 社会福祉学部 講師
連絡先：庄司知恵子 s-chieko@iwate-pu.ac.jp

Summary

This article is focused on social organizations for women “KANNON-KOU” and “NENBUSTU-KOU” in a hamlet (mura). This article explains the relationship between local women and women’s social organizations. It then clarifies the gradual change in the relationship. Finally, it discusses the meaning of the gradual change.

Generally there is a social organization for men called “KEIYAKU-KOU” in a hamlet. Hamlets establish some social organizations depending on gender and age. “KANNON-KOU” and “KEIYAKU-KOU” are social organizations for women. Previously, people were recognized as a member of that hamlet when they belonged to an organization there. Therefore, we can understand changes in the relationship between local women and their organizations by discussing the changes in “KANNON-KOU” and “NENBUTSU-KOU”.

In Kitakami-cho, “KANNON-KO” is defined as “a group of wives”. Women must belong to “KANNON-KOU” when they get married with men who live in this community. This organization has a role of praying for easy childbirth. Members spend two days in a year, eating lunch and dinner together, praying God and deepening their friendship with each other. But older members were very strict on younger members. However after the Great East Japan Earthquake, “KANNON-KO” did not function at all and some of them have already been disbanded.

On the other hand, “NENBUTSU-KOU” is defined as “a group of mothers-in-law”. Women move to “NENBUTSU-KOU” from “KANNON-KOU” when their son(s) get married. The main purpose of “NENBUTSU-KOU” is to pray for their ancestors. While they do eat meals together in the same way as “KANNON-KOU”, there is no strictness. Further, “KANNON-KOU” has continued after the Great East Japan Earthquake.

Local organizations for women and the implications have gradually changed with their daily life in the hamlet. The fact that “KANNON-KOU” had already been disbanded and “NENBUTSU-KOU” continues demonstrate what is the most important thing for women’s life in this hamlet.

Keywords: hamlet (mura), “KANNON-KOU”, “NENBUTSU-KOU”,
local woman, social organization

要 旨

本稿では宮城県石巻市北上町における女性組織「観音講」と「念仏講」について説明し、その活動の変遷から集落と女性との関係の変化を捉え、それが何を意味するのかについて考察する。

集落には世帯主が参加する自治組織「契約講」があり、これを基軸として性別・年齢ごとに属する組織が用意されている。本稿で取り上げる「観音講」と「念仏講」は、集落内において女性が加入する組織である。旧来、そこに暮らす人々は属性に応じた各組織に所属し、集落の一員として位置づけられてきた。すなわち、「観音講」と「念仏講」の変遷について論じることは、集落と女性との関係の変遷を捉えることにつながると言えよう。

北上町において、「観音講」は「お嫁さんの会」として理解されている。女性は村落に嫁いだ時点で観音講への加入、参加が義務とされてきた。観音講は安産祈願の組織であり、年に2回、共同飲食を行い、神様を拝む。嫁同士の親睦の場としての意味も備えていたが、上の世代による下の世代へのかかわり方は非常に厳しいものであった。ただし現在30-40歳代の女性たちにとって参加は必ずしも義務ではない。東日本大震災以降においては、観音講の活動が自然消滅してしまった地域も多い。

一方で「念仏講」は、「お姑さんの会」として理解されている。家に嫁が来た時点で、それまで観音講に所属していた女性は念仏講に移る。念仏講では、村落を構成している家々からの参加によって祖先の霊を弔うことが目的とされており、数珠や太鼓を用いて弔いの儀式が行われる。念仏講においても共同飲食を伴うが、観音講のような「厳しさ」はあまり聞かれない。また、東日本大震災以降も念仏講は継続されている。

生活の変化とともに、女性が参加する組織、女性にとっての村落生活の意味も変化してきた。東日本大震災を契機とした観音講の消滅、念仏講の継続という状況は、当該地域の人々にとって共有できるものは何かということを提示している。

キーワード：集落、観音講、念仏講、地域女性、自治組織

1. 本稿の目的

本稿では、宮城県石巻市北上町における女性の組織「観音講」と「念仏講」を取り上げる。宮城県では、集落（村落）を単位とした自治組織のことを、「契約講」と呼ぶ。この契約講は、村落の様々な決まりごとを決定する組織であり、各家から1人、世帯主が参加することで構成されている。集落においては、「男性の組織」として理解されている。その一方で、女性の組織として理解されているのが「観音講」と「念仏講」である。一般的に、「観音講」は「お嫁さんが入る会」として、「念仏講」は「お姑さんが入る会」として理解されている。集落においては「契約講」を軸としながら、年齢と性別に合わせた集団が用意されており、集落到暮らす人々はそれぞれの年齢と性別に応じた組織に所属することによって、集落の一員として位置づけられてきた。しかし、このように明確に区分された組織のあり方を現在捉えることは難しい。つまり、かつては明確な区分のもとに各々が各組織に所属しながら集落での暮らしを送っていたが、今日においては必ずしもそうではなく、時代の流れに伴う生活の個別化、広域化、社会化等によって、集落内組織の持つ意味、果たす役割が変わってきたということである。村落に暮らす住民ならば、かつては厳密な区分とルールのもとでしかるべき組織に属することが、その集落の暮らしには不可欠であり重要な意味を持っていた。他方で、今日の集落での暮らしにおいて、それらの組織は一体どのように位置づけられるのだろうか。また、それらの組織が持つ意味、果たす役割は、一体どのような変遷をたどっているのだろうか。本稿では、とりわけ「観音講」と「念仏講」に焦点をあて、「女性の生活」の側面からこれらの問いについて考察し、現時点における暫定的な結論、ならびに今後の課題を導く。

本稿では、宮城県石巻市北上町に暮らす女性への聞き取り調査をもとに、「観音講」および「念仏講」の活動状況の変遷から、集落と女性との関係の変化を捉える。時代の変遷に伴いながら次第にその生活様式が変化してきたなかで、集落内ではどのようなことが共有されてきた／共有されなくなってきたのだから

うか。そして、「観音講」と「契約講」、それぞれの現状を把握することから、それらが現在集落内において持つべき意味、果たすべき機能について分析する。

以下では、まず「契約講」、「観音講」ならびに「念仏講」について説明をする。次に、聞き取り調査のデータをもとに「観音講」の活動の変遷を追い、その上で集落と女性との関係を考察する。その変化の内容から、現代農村における集落のあり方、村落内組織が持つ意味、果たす役割について分析を深める。本稿は、当該地域における「観音講」および「念仏講」に関する詳細な記録を残すと同時に、当該地域に限定されることなく地域社会における組織の今後のあり方を考える際に有効な視座を提示するデータになると予想される。

2. 地域概要・調査方法

本稿で対象地とするのは、宮城県石巻市北上町¹である。北上町内北上川河口地域には、広大なヨシ原によって形成される風光明媚な景観が広がっており、漁業、農業を基幹産業としていた。しかしながら、2011（平成23）年3月11日に発生した東日本大震災に伴う津波により、当地域は甚大な被害を受けた。その被害は、人口3,718人（当時）中、死者・行方不明者265人、住戸に関しては全壊633棟、半壊および一部損壊他463棟（被害がなかったのは55棟のみ）にも及ぶ。当該地域では現在、住戸に対しては防災集団移転が進められたり、漁業復興に対しては協業化に向けた動きが見られたりと地域社会の復興に向けて様々な法政策が整えられている。

本稿は、2004（平成16）年7月から継続的に行っている聞き取りを中心とした質的調査をもとにしており、その調査の一部を取り上げるものである。当初

1 北上町は、2005（平成17）年に石巻市、桃生町、河北町、雄勝町、牡鹿町との1市6町の合併により石巻市となった。本稿で対象とするのは、旧北上町のエリアである。旧北上町は大きく橋浦地区と十三浜地区に分かれており、それぞれ8集落（馬鞍、本地、長尾、大須、行人前、二丁谷地、釜谷崎、女川）、13集落（追波、吉浜、月浜、立神、長塩谷、白浜、小室、大室、小泊、相川、小指、大指、小滝）からなる。

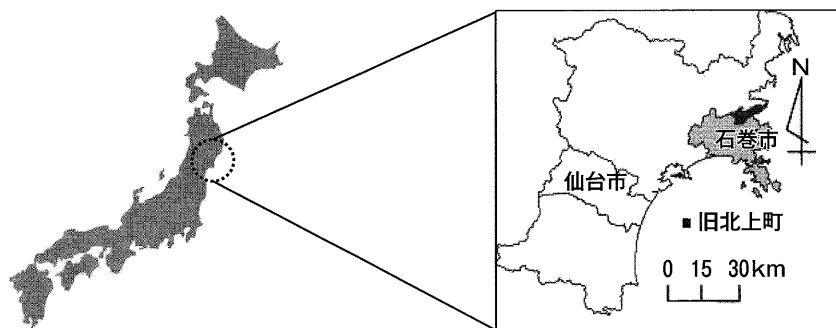


図1. 研究対象地
(国土地理院数値地図2万5千分の1引用、執筆者改変)

は、北上川河口地域に生息する大規模なヨシ原を研究対象として取り上げ、暮らしにおける「自然-人間」関係の視点から主に地域住民とヨシ原とのかかわりについて調査を進めた。そして、地域住民が「地域資源」としてヨシを管理・利用してきたこと、そこには地元の地域社会組織との濃密な関係性があること

が次第に明らかになり、社会組織やその規範を通した環境利用のしくみに着目した（宮内編，2009；黒田，2010）。さらに、ヨシに限らず、地域住民が周囲の自然環境から資源を引き出し、多様な生業活動を展開し、それらを複合的に組み合わせることによって当該地域での生活を組み立ててきたことの重要性を指摘した（武中，2008；黒田，2009）。当該地での調査活動を進める過程で女性組織の存在が明らかになり、地域女性を対象とした調査を進めるに至った。

3. 村落における組織

3.1 宮城県における村落自治組織「契約講」

本稿で取り上げる北上町の「観音講²」は、集落内の嫁世代の女性によって構成されており、安産祈願を共に行う場として組織されている。全国各地に「観音講」の名称がついた集団が存在するが、地域によっては必ずしも女性の集団ではなく、男性の年序集団として位置づけられているところもある³。この

2 「観音講」の「講」とは、宗教上もしくは経済上その他の目的を達成するために、志を同じくする人々の間で組織された社会集団のひとつを指す。観音講に限らずその組織体に「講」という名称がつく集落内自治組織は、一括りに「講集団」と言われる。「講」とは本来は仏教上の述語であり、仏典を講義し、講説する用例として使用され、当初は仏典を講究する仏僧の研究集会を指していた。仏教の布教の過程で、同じ信仰で結ばれるそれらの信徒集団を示す語に拡大され、やがて仏教上の信仰のみならず、広く民間における信仰上の同志的結合団体に用いられるようになった。それがさらに拡張解釈され、経済上・社会上・文化上の集団にも広範に適用されるようになった（桜井，1985：191-192）。仏教上の信仰結社であった「講」は、地方へと広まっていく過程で、在来土着の氏神信仰や民間信仰と接触するようになり、姿形を変容させ大小広狭多種多様な非常に錯綜した姿を示すようになった（桜井，1966：483）。

3 京都府城陽市寺田地区における観音講は、小学校を卒業するとすぐに入る同じチョウ内の中で同じ学年かその前後のものでつくられる同齡集団であり、このつながりは、シンセキやキンジョよりも深いといわれ、不祥事があると中心に動き、困ったときには一番に助け合うことになっている。信仰的なことはせずに、親睦会のようなものであるという。女性が参加するものも、別に組織されたという。それ以外に、観音様を拝む「観音講」も存在するという（城陽市，1995：79）。

ことは、「観音様を拝む」という仏教的な儀式が、伝播の過程において、土着の信仰やその土地の生活条件に合わせながら姿かたちを変容させていったものとして推測、理解できる。

さて、北上町の「観音講」を論じる際には、まず「契約講」との関連から捉えていく必要がある。と言うのも、集落内に複数存在する組織の各々は、「契約講」を基軸としてその構成員が決められ組織されているからである。東北地方、なかでも宮城県を中心として各集落には「契約講」という講集団がある。「契約講」は、村落における生活互助のための自治組織であり、村落内での協同生活に関する様々な取り決めを行う。「ムラが協同体として生きていくための機能を備えた組織であり、生活・生産・信仰・祭祀などムラの全般にわたってかかわる規約と統制力を有する存在」（北上町、2005：298）であり、同じ村落内に住む人たち同士の協力の母体であった。「契約講」は、単に「契約」、「ケイヤク」と言われることもあり、通常、「一部落一ケイヤク」というように、集落単位で構成される。そして、その構成員はダナドノ（旦那殿（＝戸主））と呼ばれる世帯主である（桜井、1966：152-153）。もともとあった伝統的な自治組織である「契約」、「けやぐ」という組織が、「契約講」として捉えられるようになったという説もある（江馬、1999：99）。

契約講の構成においては、「地縁を同一にしている」ことおよび「年齢階梯制による序列」が重視されている。信仰的、経済的なことは特段関係なく、また、同族（ドウゾク）⁴やシンルイ⁵といったようにそのメンバーが限定されていない。不幸や病人を抱える家に対する助力、屋根の葺き替えなどにおける合力など、家単独あるいはシンルイだけの力で対応することが困難なことに對して、ムラの合力を必要とする場面で契約講はその役割を果たし、それが規約上でも規定されていた。また、親睦や、村落の構成員に対する徳育面の機能も有していた（桜井、1996：152）。

4 「本家-分家関係」を指す。

5 「親子、婚姻関係、出自によって発生する関係」を指す。

3.2 村落における年序集団

村落には、「契約講」を軸として、性別、年齢ごとに加わる組織が用意されていた。「ムラに住居を構え、そこに住んでいる人々は誰でも、もれなく加入するものとしてこれは組織され、その組織のあり方は、性別と年齢の別によって組み分けられたいくつかの集団が内部に出来ていて、ムラ人たちは自分のそれぞれの属性に応じて、そのいずれかの集団に所属しながら、この組織に参加するというものになっていた」(江馬, 1996: 99-100)とされ、住民たちは、各々の性別と年齢に合わせた組織に参加することにより集落の一員として位置づけられてきた。その階梯制の状況は地域ごとに異なっていたが、基本的に、男性は子ども組→若者組(青年団)→中老組(壮年団)→家長組(戸主会)→隠居組(老人会)、女性は子ども組→むすめ組→嫁組→主婦組→姑組(老人会)というようになっていた(江馬, 1996: 99-100)。すなわち、村落生活の中心世代として、男性は家長組である「契約講」に、女性は主婦組である「観音講」に参加することが義務づけられていたのである。

しかしながら、現在ではここまで明確な組織の階梯制を捉えることは難しい。本稿で対象とする北上町も例外ではなく、「高度経済成長期以降、経済、社会構造の変化に伴い、「契約講」も影響を受け変容している」と『北上町史』にも記されている(北上町, 2005: 298)。村落自治の中心である、契約講の変容の影響は、その他の年序集団にも及んでおり、本稿で取り上げる「観音講」もその影響を免れない。次章では、聞き取り調査の内容を再構成しながら、その変容について具体的に明らかにし、考察を進める。

男		女		男		女	
契約講 (戸主会)	42歳	念仏講 (主婦)	嫁 (青年団)	(庚申講) 年寄り契約 (隠居)	61歳	念仏講 (ババコウ)	観音講 (カガコウ) 地蔵講 (嫁講)
若者会 (山の神講)		25歳		若者契約 (実業団契約) (ワカイモン)	42歳		
(青年団)		15歳		子ども契約 (ワラシ)	結婚 15歳	(手伝娘仲間) (孫女仲間)	
刈田郡七ヶ宿町滑津(山村)				牡鹿郡牡鹿町小網倉浜(漁村)			

男		女		男		女			
部落会 (戸主)	42歳	精進講 観音講 (姑)	女鉄柄講 (嫁) (山の神講) (青年団)	寺の講	60歳	寺の講 観音講 (姑)	契約会 (主婦会) 婦人会 (山の神講) (嫁) (青年団)		
鉄柄講 (既婚)		25歳		契約会 (戸主会)	50歳				
青年団		15歳		壮年会	35歳				
子ども仲間				青年団	25歳				
加美郡宮崎町切込(山村)				仙台市四郎丸(農村)					

男		女		男		女			
部落会 (戸主)	30歳	念仏講 (姑)	小牛田の 山の神講 (嫁)	庚申講 部落会=漁協	60歳	念仏講	観音講 地蔵講 (山の神講中) (嫁)		
契合会 (出羽三山講)		18歳		実業団 (竜神講)	40歳				
子ども仲間				青年会	38歳	結婚 15歳		青年会	
名取郡秋保町馬場(山村)				子ども会	子ども会				
				牡鹿郡女川町飯子浜(漁村)					

資料1. 宮城県内各地の年齢階梯制と契約講
出典：『みちのくの村むら』：197.

4. 女性の組織「観音講」と「念仏講」

4.1 「観音講」とは

北上町に暮らす女性、とりわけ現在50歳以上の女性に「北上町での女性の生活について教えてください」と尋ねると、必ず「観音講」が話題にのぼる。その背景には、かねてより北上町では「観音講＝村落社会における女性の集団」として位置づけられてきたこと、当該地での彼女たちの暮らしは「観音講」とは切っても切れない関係にあることがある。

『北上町史』（北上町，2005）にもとづけば、「観音講」では「嫁たちの講で三月、十月の十七日を講の日とし、廻り番の宿に集まり精進料理で会食する。近くの観音堂や山の神供養塔を参拝し、時には小牛田の山神社⁶に代参入を立

てていた。(北上町)大室(集落)では『オナゴ』契約といい、嫁いでくると姑と交替して仲間入りをした。二月と十月の二十四日が講の日で一日仕事を休み宿に集まり会食する。初めて加入した人が一人ずつ参拝に行っていた」⁷(北上町, 2005: 504)。北上町内の集落ごとに、その開催日や執り行われ方、名称等に多少の違いはあるが、特定の日に集落内の嫁世代が一所に集い、共同飲食を行い、神様を拝むという観音講における基本的な行為は共通している。嫁世代の女性にとって観音講は、親睦の場としての役割も備えていた。

ここでは、観音講の内容について具体的に記していこう。観音講は年2回行われ、女性たちはその日丸々1日を観音講に費やす。女性が「お嫁さん」として嫁いでくると、それまで観音講に参加していた姑と交代して参加することになるが、嫁がいない場合はそのまま1人の女性が継続的に参加し、決まった年齢に達した時点で観音講を引退する⁸。嫁世代との交替による場合、年齢基準による区別なく、観音講を引退することを「(観音講を)あがる」と言う。観音講を実施する場所も集落によって異なるが、地域の中の大きな家(旧家)で開催する集落もあれば、地域の集会所を利用したりする集落もある。

初めて観音講に参加する人を「ハツデキ」と呼ぶ。「ハツデキ、歌っこ歌わせられるわけ。それが嫌で、やっぱ入りたくないってなってね」⁹、「踊りを踊れとか、歌を歌えとかそれが辛かったね」¹⁰というように、「ハツデキ」は参加者全員の前で歌を披露しなければならず、女性にとってそれは観音講における「苦痛」のひとつとして記憶されている。そこには、歌を歌うという行為に対する「恥ずかしさ」以外に、それを厳しく見定める「トシダカ」の存在を挙げ

6 伐木、炭焼きなどの山仕事に従事する人々。鉾山労働百や狛師などの守護神であるほかに安産を司る神としても信仰されている。山の神は男神、女神、あるいは夫婦神とも伝承されている。遠田郡子牛田町に鎮座する山神社は県下一円を信仰圏としている(北上町, 2005: 437)。

7 ()内は執筆者による補足である。

8 年齢基準による場合は集落によってその年齢が異なり、おおよそ45歳くらいである。

9 2013年7月29日 O.T.さん(昭和12年生まれ、追波集落)への聞き取りより。

10 2009年3月17日 C.Y.さん(昭和4年生まれ、追波集落)への聞き取りより。

ることができる。「トシダカ」（地域によっては「デンボサン」と呼ぶ）とは、観音講における年長者の呼称である。「トシダカ」を頂点とした上の世代の人たちによる下の世代へのかかわり方は大変厳しく、お辞儀の仕方にはじまり、観音講の最中の私語や行動などが厳しく制限されていた。「ハツデキ」と「トシダカ」との関係について、たとえば現在70歳代の女性は、自身の初参加当手を振り返りながら次のように語る。

「トシダカさんってのがいて、トイレに行くときでも、そのトシダカさんに『いってきます』って行かなきゃならなかったの、私たちの時代は」¹¹
「観音講は、うんと厳しかったの。必ずトシダカさんところさ行って、暇もらわなきゃ、ただ勝手に立って歩かれなかったんだもの」¹²

現在50歳代の女性も、自身の初参加当時に対して同じような感想を持つ。

「隣の人と何お話ししたらいいのかなあって緊張感があって、本当1回目は苦痛の一日だったね（笑）。もう厳しいって言うか、頭下げてって習慣は残ってました。トイレに行くときは、一番年上の人に頭を下げて、トイレから帰って来てもまた頭下げて、自分に席に着くっていうね。礼儀みたいなものなんだろうけど。私たちが入ったときは、出席も厳しくて休めなかったです」¹³

だがその一方で、特に現在70歳代の女性にとっては、当時は農作業に明け暮れる毎日であったため、「親睦の場」としての観音講に「楽しさ」も感じる部分もあった。

11 2008年2月27日 C.Y. さんへの聞き取りより。

12 2009年3月17日 O.T. さんへの聞き取りより。

13 2013年7月29日 S.A. さん（昭和32年生まれ、追波集落）への聞き取りより。

「観音講っていうのが唯一の遊び場だったの。その頃は休みっていうものがないから。その日は朝から夜まで。観音様を拝んで、ご馳走をいただいて、歌や踊りで一日過ごして」¹⁴

「その時は、どこさも遊びに出てかないっちゃ。出歩くってことないから、それが結局みんなとお話してできるから、楽しみ。厳しいけれども、まず楽しみつつうか、みんなしてご飯も食べるんだものね。他には何も楽しみねえんだもんね。おらたちお嫁さんになったあたりは、観音講さ行くのは楽しみだから、みんなと会ってお話したりする。夜までだっちゃ」¹⁵

観音講への参加は義務であり、「本当に身内で不幸あったとか、そういうとき以外はね」¹⁶、原則として不参加は認められなかった。

「すごく厳しくて、何か理由つけてどっかに行かなければならないって、トシダカさんをお願いするんだけど、その意味合いをちゃんとはっきりしないといけなのね。今日はこういう用事があって、お暇をいただきますって。トシダカさんも、それを（他の参加者に対して）お願いしなければいけないの」¹⁷

しかし、中には「いつも行かない人」もいる。

「いっつも嫌だ嫌だって欠席する人がいるわけさ（笑）。だから、トシダカさんも（他の参加者に向けては）いろいろ嘘を言って、休ませてくださって言うの（笑）。だけど、みんなわかってるから、また始まった！とか言うわけ（笑）」¹⁸

14 2007年8月19日 C. Y. さんへの聞き取りより。

15 2013年7月29日 O. T. さんへの聞き取りより。

16 2013年7月30日 C. M. さん（昭和24年生まれ、月浜集落）への聞き取りより。

17 2013年7月30日 C. M. さんへの聞き取りより。

4.2 観音講での決まりごと

参加に際しては着物の着用が義務づけられており、昼には昼のもの（袂）を、夜には夜のもの（元禄）を着なければならなかった。

「昔は大変だったんだよ。着物、必ず着物着て、朝に着て、今度夜はまた別な着物に必ず取り替えていかなきゃいけないの。夜まで、ご飯食べるの。朝は袂を着て行って。1回帰って、家族のみんなのお支度をして、夜はまた別な着物、元禄（元禄袖の着物）に着替えてまた行くの」¹⁹

「お腹大きくしてても参加でしょ。着物着て行かなきゃならないの」²⁰

というように、たとえ妊娠中であっても着物の着用が求められたほどであり、この点からも観音講の規律の厳しさを伺うことができる。参加者は若い嫁世代なので、乳幼児を抱えている場合も少なくないが、その厳しさからも推察できるように、子どもを連れて参加できるような雰囲気ではない。そのため、その日は子どもたちを姑や夫、隣近所に暮らすお年寄りに預けて世話を頼んで参加した。乳児のようにどうしても預けることができない場合には、やむを得ず同伴で参加をする。

「本当に母乳が必要な赤ちゃんだけ連れて行ってね。子どもと一緒に行くような場所ではないもんね。赤ちゃんだけはおんぶして、後は陰に行って母乳飲ませるとか。連れて行くのは、そういう子どもだけだね」²¹

「赤ちゃんのうちは連れて行ったの。全部おんぶして行った。泣くと、ちゃんとすぐに廊下さ出て、泣き止ませて。泣き止んだら、それからまた

18 2013年7月30日 C.M. さんへの聞き取りより。

19 2013年7月29日 O.T. さんへの聞き取りより。

20 2013年7月30日 C.M. さんへの聞き取りより。

21 2013年7月30日 C.M. さんへの聞き取りより。

戻ってね。子どもを連れて行くのに、寒くてもネンネコは着られない」²²

4.3 観音講における安産祈願

ところで、集落の女性が「観音講」を通して集まる本来的な意味は、安産祈願にある。観音講では、地域によって多少の違いはあるが、基本的には観音様の掛け軸や山の神様の掛け軸を参加者全員で拝む。『北上町史』にも、「お産の守護神は山の神であるとされ、ムラの山の神社や鎮守社などに安産祈願に行き、奉納されている『オマクラ』（枕）を借りてきて自宅の神櫃に供えておき、無事出産がすむとオマクラを2つ持ってお礼参りをする」と記されている（北上町，2005：436）。

「妊娠して、春と秋に2回、2月と11月に行ってたけど、もしほら10月頃の出産予定だったら、その前にか、赤いお手玉の大きいみたいなの、オマクラって言って、それをお寺から借りてきて、お産するときは枕元に置いて。産後は1個借りてきたんだけど、1個自分でまた作って、2個にしてお寺に返して。お手玉の結び目はきっちり結ばないで、緩く。安産の意味込めて、きっちり結ばないでね。片方はきっちりでもいいんだけど、片方は緩やかに。次に観音講に行くときに持って行って、お寺に返すのね」²³
「オマクラって、お手玉みたいなのがあって。オマクラを1個借りてくるんです。そして、神棚に、日の良い日にね、戌の日に神棚にお供えするの。なるべく軽いやつを選ぶのよね、お産が軽く済むように、軽いの借りなさいって。オマクラには、赤と白があるの。借りるときには1個借りて、返すときには2個作って、3個にして返すんです。白を借りたら、赤を縫って返したりね、お礼つつうことで」²⁴

22 2013年7月29日 O.T. さんへの聞き取りより。なお、「ネンネコ」とは、子どもを背中に背負ったまま着る防寒用のはんてんを指す。

23 2013年7月30日 C.M. さんへの聞き取りより。

24 2013年7月29日 S.A. さんへの聞き取りより。

また、毎回観音講ではお膳を用意するが、観音様、神様に捧げたお膳は出産予定の女性に配る。

「お膳は、お腹の大きい人、妊娠中のお嫁さんに『健康のために食べなさい』ってことで食べさせるの。妊婦さんがいないときは、これから可能性のあるお嫁さんにね。そのお膳も1個じゃないんだよね、3個くらいあげるの」²⁵

4.4 観音講の料理

ここで観音講での料理についても、触れておこう。共同飲食を伴う観音講では、昼と夜に精進料理のお膳が準備される。お膳は自分たちで用意するが、集落内の組（1つの集落が3～5程度の組に分かれている）が持ち回りで各回を担当し、担当に当たった組は「テエマエ（宿前・頭前）²⁶」と呼ばれる。お膳の内容は毎回決まっており、「お精進料理だから、本当にみそ汁とご飯、それに『サラ』っていうのが油揚げとこんにゃくのクルミ和え、クルミ豆腐、それにお漬け物かなあ」²⁷というような内容であった。特徴的なものとしてこの地域では「サラ」と呼ばれる料理（クルミ和え）が出される。この料理は葬式や法事などでも出され、他の地域から北上町に嫁いできた女性にとって、観音講は郷土料理の作り方を学ぶ場でもあったと言える。なお、その料理のための食材は、「みんな畑とかいっぱい作ってるから、まずそれ持ち寄ってってやった」²⁸。

では具体的に、北上町内の集落のひとつ、月浜集落での観音講の飲食の様子を見ていこう。月浜集落の観音講は「お寺さんに上がる」というように、前日

25 2013年7月29日 S. A. さんへの聞き取りより。

26 テエマエの任期は1年、1年ごとのローテーションで、各組がテエマエを担当する。

27 2013年7月30日 C. M. さんへの聞き取りより。ただし、現在70歳代の女性が参加していた頃には、クルミ豆腐がお膳につくことはなかった。

28 2008年2月27日 C. Y. さんへの聞き取りより。

にはお寺（長観寺）で拝み、杯でお酒を飲んだ。観音講当日の朝にもお寺で拝み、「オボキ」（ご飯をお茶碗に山のように盛ったもの）を、「テエマエ」が1口ずつの分量を各自の手のひらに配り、それぞれ食べた。そこには「安産っていうか、そういう意味合い」²⁹が込められていたと言う。その後、公民館で10時頃に精進料理の朝のお膳を食べた。そして一旦帰宅し、午後3時から4時頃に夜のお膳を食べるために、公民館に戻る。

「みんなして、テエマエの人たちが箸で、お碗さてんこ盛り、ギチギチ、ほら何十人分だっちゃ。みんなもらって、年の順番にもらって、食べて。16日の朝にお寺に行って、お寺から下がって公民館さ行って。で、公民館でちゃんとしたご飯（朝のお膳）いただいて、また、解散したんです、私が嫁に行ったところは、そして、また着物着替えて、また夜行くんですよ。3回あるんです。前の晩と16日の朝の膳と夜の膳と」³⁰

4.5 観音講の財産

お膳の準備の他にも、座布団にカバーをかけたりゴザを敷いたりするなどの支度を、テエマエに当たっている組の女性は前日より行った。北上町月浜集落では食器に関しては、観音講の「財産」として管理されており、たとえば契約講での使用の際や集落内の家庭での冠婚葬祭等での使用など必要に応じて、しっかりした管理体制の下で貸出しも行っていた。

「食器に関してはちゃんと帳面があって、借りたいときはちゃんとその年のテエマエの人に立ち会いしてもらって、これは何個ね、これは何個ねって。それで返すときも、そうやって厳しく管理はしたの。もし壊したり何かしたら、合計数をちゃんと書き直してね。壊したからって弁償ではなく

29 2013年7月29日 C.M. さんへの聞き取りより。

30 2013年7月29日 C.M. さんへの聞き取りより。

て、違うのよこされても困るから、お金でね」³¹

そして、食器以外に「座布団」も観音講の管理下にあるが、テーマエに当たっている組がそれらを1年間預かり管理する³²。座布団にはつづれている箇所があれば、その1年間の内に補修する。そして、次の観音講が行われる前夜に、次のテーマエへと「戸渡し」する。

このように、多くの集落で一通りの作業が決まっており、次の世代に受け継がれていた。すなわち、観音講とは女性が集まる組織であると同時に、食器等の管理といったように、集落の中での宴会や活動などを維持する際の重要な役割を果たしていたことがわかる。

4.6 「念仏講」とは

村落における女性の集団として、「観音講」のほかに「念仏講」がある。『北上町史』には、北上町女川集落の念仏講についての記述がある。「(北上町) 女川(集落)の念仏講は老婆たちによって組織され、春秋の彼岸、盆、成道会などに寺に集まり念仏をする。太鼓、鉦に合わせて百万遍の数珠を廻している」³³(北上町, 2005: 504)とあるように、念仏講は、高齢女性の参加する集団として理解されているが、基本的には「仏さんがあれば必ず出る」³⁴というように1軒から女性1名の参加が義務づけられている。姑世代が不在の場合は、嫁世代が観音講と念仏講の両方に参加する³⁵。

31 2013年7月30日 C.M. さんへの聞き取りより。

32 たとえば追波集落の観音講では、財産として座布団100枚を保有しており、集落内の人々が冠婚葬祭等で必要とした場合には有料で貸出し、その収入を観音講の財産として貯金していた。毎年集落内の上地区／下地区内それぞれ1軒ずつが持ち回りで座布団50枚ずつを1年間預かっていた。

33 () 内は執筆者による補足である。

34 2014年4月15日 C.M. さんへの聞き取りより。

35 たとえばC.M. さん(昭和24年生まれ、月浜集落)は、「観音講にも出たし、念仏講にも出たし」という経験を持つ。

念仏講では、集落を構成している家々からの参加によって祖先の霊を弔うことが目的とされており、数珠や太鼓を用いて、弔いの儀式が行われる。北上町月浜集落では、念仏講は春と秋のお彼岸に、それぞれのお彼岸までに亡くなった人たちの霊をみんなで弔うという意味があり、参加者全員で鐘に合わせて数珠を回す。たとえば月浜集落では、その年に家族の誰かが亡くなった家では、3,000円を支払って、念仏講でお念仏をしてもらう。このお金は念仏講で管理し積み立てられており、念仏講で大きなものを購入する際に使った。念仏講においても皆で食事をする時間があったが、観音講のときほどの準備は必要なく、食事もうどんなど簡単なものであった³⁶。例年、毎年1月16日と8月16日にもお念仏を拝むことだけを行った。

「念仏講も、なんか観音講と同じ感じだよ。メンバーはだいたい同じで。念仏講は年齢制限なかったから、いつまでも身体が続く限り行ってたんだけど、だんだん歳取ってきて、テエマエに出るのがあれだからってことで75歳とかって年齢制限つけたりしたんだね。その前は、本当観音講と同じようにやってたんだよ、お辞儀して何してって」³⁷

とは言え、参加者が姑世代であること、すなわち観音講に属する嫁世代とは違って姑の存在や帰宅後の食事の支度など家事に関することを気にしなくても構わないことから気兼ねなく、飲酒が行われた。時には歩けなくなるまで酔っ払う人たちもいたと言い、北上町の高齢女性にとっての息抜き場であったと言える。「ある程度の年齢になってるから、いろんな歌とか踊りとか自分の得意を出せるような形でね。それは嫌がらないで、みんなで楽しく。本当はご先祖様の供養なんだけど、でも結構楽しくね」³⁸という語りからも、念仏講の「楽しさ」を理解することができる。

36 近年は、参加者各自から1,000円を集金し、お膳を取るようになった。

37 2014年4月15日 C.M.さんへの聞き取りより。

38 2013年7月30日 C.M.さんへの聞き取りより。

5. 女性の組織の変遷に見る、女性の生活の変化

5.1 「観音講」の変化

観音講に対するイメージは、年代によって少しずつ異なる。現在70歳代の女性に観音講の話を聞くと、「厳しかった」という印象を持ちながらも、その反面では親睦の場として「楽しかった」というイメージも併せ持つ。それは、彼女たちの世代が、毎日生業に明け暮れていた暮らしを営んでいた世代であることにも関係深い。

現在50-60歳代の女性からも観音講の「厳しさ」を聞くことができるが、同時にその変化についても聞くことができる。たとえば、着物から洋服へという観音講での服装に関する変化が見られるようになったのも、この世代である。

「当時は着物って決まっててね。私、26年前、11月にお腹が大きくて、それまでには例がなかったんだけど、臨月だから洋服でもいいよって言われてたけど、あまり目立たなかったから着物で行くって言ったの。でも、その前に予定日より早く子ども生まれちゃったから、観音講の日は病院にいました（笑）。で、そこから、年1回は洋服になったんですよ」³⁹

「私たちの世代は、みんな赤ちゃんがいたから、みんな赤ちゃんを連れて行っただのね。ネンネコをして」⁴⁰と、子どもを連れて行くことに関しても、かつての観音講とは異なる側面が見られる。

また、市街地への通勤等により北上町外で仕事を持つ女性が増えた結果として、次第に観音講への参加が難しくなる人が現れはじめ、徐々に全員の参加が困難となった。それに対応して、固定されていた日程を日曜日に変えて観音講を実施しはじめたのも、この世代である。その時期は集落によって多少前後するが、概ね1990年頃から従来年2回行っていた観音講は年1回の開催となっ

39 2013年7月29日 S.A. さんへの聞き取りより。

40 2013年7月29日 S.A. さんへの聞き取りより。

た。その背景には、ライフスタイルの変化に伴う個々の生活の重視が挙げられる。たとえば「3月に観音講をやろうとなったら、参加者が少なかったんです。どうしてもほら、(子どもたちの)受験があるでしょ」⁴¹というように、子どもたちの高校受験の結果発表時期との重複による参加者の減少を受け、旧暦の2月には開催されなくなった。そして、年1回、旧暦の10月の実施となってからは、開催場所を集落内に限定せず、温泉施設に行ったり、観光地に赴いたりに参加者全員で集落外に出かけて行われるようになった。これを「移動」という。

「みんなでいろいろと決めて、トシダカさんの意見も聞いて、どのへんがいい、近くがいいとか、少し遠くに行こうとかいう感じで。日帰りのときもあれば、1泊するときもあり、行き先には女川町、松島町、秋保温泉とかね」⁴²

「釣石神社に寄って拝んだら、どこかに移動してね。泊まりで出かけた年もあったんだよ。楽しく遊ぶってのが目的だから」⁴³

「移動」でどこかに出かける前には神社や寺院を訪れ観音様を拝む、あるいは移動先には掛け軸を持参するといったように、観音講の本来的な目的である安産祈願を欠かすことはなかったが、あくまでも形式的なものであった。実質的には、観音講は次第に親睦や慰安の意味が強くなっていった。

さらに、「移動」への変化に伴って、毎回当番制で準備をしていた食事に関しても、外食（「移動」で出かけた先での会食）や出前を取ったりするように変わった。

「夜はだんだん寿司取って食べたっちゃ（笑）。お膳の準備は面倒くさいからやめましようって話になってね。ほら、昼と夜と同じだから（代わり映

41 2013年7月29日 S. A. さんへの聞き取りより。

42 2013年7月29日 S. A. さんへの聞き取りより。

43 2007年8月19日 C. T. さんへの聞き取りより。

えのしない料理になってしまうから) 辞めましょうってことになってね(笑)』⁴⁴

そして、「お話ししながらゴロっと寝転がったり」⁴⁵できるなど、観音講そのものの雰囲気も次第に変化してきた。加えて、観音講で管理する財産については、女性が積極的にそのルールを変えたりもした。

「50枚の座布団を1軒の家で1年間預かるのも大変だし、借りるときにその保管している家を探すのも大変だし、ということで、座布団の貯金があったから公民館の古い戸棚を直していただいて、座布団100枚が入る棚を作ってもらってね。観音講の人たちはみんな、座布団が回ってこないと気が楽だって」⁴⁶

30-40歳代に世代が移れば、観音講にはまったく参加しないという女性も珍しくない。

「今じゃ、来ないことが当たり前みたいになってるよね。今の人は断るよ。今はもう入りたくなければ、入んないんだもん。昔は、北上町を出て石巻市内なんかで所帯持っても、そのときは必ず帰ってきてね。それに、今の人は行きたくないってはっきり言えるんだよね。たとえば私らなんかのときは、嫌だなあと思っても行くわけさ」⁴⁷

この世代においては、参加自体が「自由」なものとして理解されている。この変化は、女性の働き方の変化、意識の変化と結びついており、村落内におけ

44 2013年7月30日 C.M. さんへの聞き取りより。

45 2013年7月30日 C.M. さんへの聞き取りより。

46 2013年7月29日 S.A. さんへの聞き取りより。

47 2013年4月15日 C.M. さんへの聞き取りより。

る女性の位置づけ、役割、女性の生活における村落の占める割合の変化に呼応しているとも言えよう。

北上町の女性は、組織の形骸化を事実として認めた上で、「寂しく思うところもある」⁴⁸、「やっぱり残していきたい」⁴⁹という思いを伴いながらも、観音講の現状については「仕方がない」と思う部分もあると言う。

「最初は、観音講さ出ないってどういうことだって非難ごうごうだったの。あんうるさいお姑さんの嫁さんが来ないって、って。うんとうるさかったの。けども、嫁さんに行かないって言われれば、自分の嫁には何とも言えないから、だんだんにね。すぐにおっかなかった人でも、自分の嫁さんには何とも言えなかったみたいで、ええー！？そんなもんかい（笑）と思ってさ」⁵⁰

観音講はその厳しさゆえ、「なくしたいもの」として引き継がれてきて、東日本大震災をきっかけとして、「なくした」といってもよいかもしれない。これまで、観音講は、その時々状況に合わせて、執り行い方を柔軟に変化させてきた。それは、最終的になくなることを暗示していたのかもしれない。震災後、観音講が活動停止にある状況を女性たちは、「震災があったからなくなったけれども、震災がなくてもなくす決断をするときだったのかも」⁵¹と考えている。

5.2 「念仏講」の継続

時代の変遷に伴う「観音講」の変化はこれまでに記した通りであるが、東日本大震災による影響も捉える必要がある。東日本大震災後の「観音講」は、集

48 2013年7月30日 C.M. さんへの聞き取りより。

49 2013年7月29日 S.A. さんへの聞き取りより。

50 2014年4月15日 C.M. さんへの聞き取りより。

51 2014年4月15日 C.M. さんへの聞き取りより。

落によって解散、活動停止、自然消滅といったように、その状況は異なるが、北上町内いずれの集落においても現在も行われていない。一方で、もう1つの女性組織「念仏講」については、その活動が継続されている集落もある。たとえば北上町追波集落では、観音講は解散されたが、「震災後はお墓の前でやったり、お盆にも仮設の集会所でちょこっとやったり」⁵²というように、念仏講は継続されている。また月浜集落でも観音講は行われていないが、念仏講は現在も続けられている。

「月浜（集落）では、被災後もやってるよ。うちの方はお寺流されなかったから、お寺でね。50人も60人も亡くなったから、1つだけお念仏を唱えてね。震災の後初めてやったときは7人だか8人だかしがいなくて、鐘を叩く人と太鼓を叩く人と2人いるんだけど、数珠を回す人が少なくてね。いる人たちに回してもらって、お念仏してね」⁵³

震災後に念仏講が継続されているのは、「亡くなった人のために、お念仏をあげる」ためである。そのため、これまで「女性の組織」として集落内で位置づけられてきた組織への男性の介入も承認し、男女にかかわらず念仏講に参加するようになった。そして念仏講への参加について、北上町に暮らす女性たちは「行ける限りは行きたいと思う」⁵⁴と考えており、将来的にも「残していく必要があるもの」⁵⁵として捉えている。

6. まとめ

以上見てきたように、時代の変化に対応しながら、北上町の女性の組織「観音講」と「念仏講」はその内容を変化させてきた。いずれの組織も村落におけ

52 2013年7月29日 O.T. さんへの聞き取りより。

53 2013年7月30日 C.M. さんへの聞き取りより。

54 2014年4月15日 C.M. さんへの聞き取りより。

55 2014年4月15日 C.M. さんへの聞き取りより。

る女性の組織であることに変わりはないが、東日本大震災をきっかけとして「観音講の解散」／「念仏講の継続」というように、その現状には差がある。この差を導いたものは、一体何なのであろうか。

お金を使う機会もなく、年がら年中、農作業に明け暮れていたかつての北上町の女性にとっては、観音講は厳しいとは言え、唯一の親睦の場、楽しみの場、仲間に会える場でもあった。また、他の集落から嫁いできた女性にとっては、挨拶の仕方を教えてもらう場、地域の女性たちと顔を合わせる場、集落に伝わる料理を教わる場としても機能しており、その意味で、集落に嫁いできた女性の再社会化の基盤であったとも言える。しかしながら、観音講に対して、このような解釈が通用するのは、現在70歳代以上の女性までである。

現在50－60歳代の女性の語りからは、観音講の内容の変化だけでなく、観音講が備える意味自体の変化を捉えることができる。観音講の本来的な意味は安産祈願にあるが、この年代の女性においてはそのような意識がない。聞き取り調査を進める過程で、随分と話が進んだ時点において、改めて「そもそも観音講とは、一体何の会なのですか？」という問いかけをして初めて、彼女たちは安産祈願の意味合いについて触れる。その背景には、自宅から病院へと出産の場所が次第に移っていったのがこの世代であったことも関係しているのではないだろうか⁵⁶。すなわち、生活空間から「出産」という行為が離れてしまう過程において、安産祈願の意味も徐々に形骸化し、観音講の特徴とも言える「厳しさ」は減り、その反面で親睦の意味合いが強くなってきた。観音講の集まりを集落から離れて「移動」して行うようになったのは、この世代の女性である。

さらに、30－40歳代の女性たちは、観音講への参加を「自由なもの」として理解しており、彼女たちの生活から、集落と女性の関係を描き出すことは困難である。つまり、彼女たちにとって観音講は、生活を遂行する上で必要な場ではなくなくなってしまっていると言えよう。安産祈願の場である必要もなければ、楽しみを共有する場でもなくなったということである。そして、必ずしも集落

56 たとえば昭和24年生まれ、現在 C. M. さんは、自宅で出産をしたのは集落では自分が最後だと話す。

に生活の基礎を求めている彼女たちにとっては、集落が生活の再組織化の基礎でもなくなってしまうている。その結果として、東日本大震災以降において観音講の解散という事象が生じていると理解できる。

その一方で、「念仏講」は東日本大震災以降も残っており、将来的にも継続すべきであると捉えられている。このことは、集落が共有すべき生活の究極の部分として「死の共有」があるのではないだろうか。「死」は誰にとっても訪れるものである。したがって、誰にとっても必要な行いである「弔い」の場として、「念仏講」の必要性が強調される。東日本大震災以降、性別を限定せずに男性の参加も受け入れるようになったこと、すなわちそれまでの厳密なルールを変更してでも念仏講を継続させようとした点から、それらをうかがい知ることができるだろう。

本稿のまとめとして、これら状況から観音講の解散と念仏講の継続について2つの理由を考える。ひとつは、「解散」と「継続」は、一見すると相反する結果のように考えられるが、根本は同じことなのかもしれないということである。つまり、出産をする女性が減り、子どもの数が減り、出産の場自体も集落から離れてしまった今、安産祈願は集落全体で共有することではなくなってしまった。その結果として、観音講は特段必要ないと考えられ、解散に至ったことは、ある意味では当然のことと言える。それに対して、誰にとっても訪れる死は、集落全体で共有すべきことであり、それが念仏講の継続につながっているのではないだろうか。したがって、観音講における「親睦の場」という意味合いや機能は、本来的に組織に求められていた役割に付随していたものであり、集落の外に楽しみの場を求めるようになった現在においては、本来、組織に求められていた役割がより純粋に求められるようになった結果、「観音講の解散」ならびに「念仏講の継続」といった状況を導いていると言えるのではないだろうか。

もうひとつは、現在50-60歳代の女性と集落とのかかわりが、他の年齢層のそれとは異なるという点が深く関係しているのではないだろうか。言い換えれば、「観音講」の活動を変化させてきたのも、「念仏講」の活動を継続させてい

るのも、現在50-60歳代の女性であるということである。すなわち、「観音講」と「念仏講」の意味合いの違いというよりは、むしろ現在50-60歳代の女性たちにとっては暮らしにおける集落とのかかわりが重要な意味を持っており、生活における集落の存在意味を捉える際には、この世代が分岐点となっていると言えるのではないだろうか。ただしこの点については、村落ごとの詳細な分析が必要となるため、次なる課題となる。

最後に、簡単ではあるが本研究の限界と今後の課題について記す。村落組織の変遷と生活の変遷を捉える場合、本来であれば、村落構造の分析の中に各組織を位置づけて行う必要がある。また、個人が観音講や念仏講を通して、どのように村落内に位置づけられているのかといった分析も必要となる。しかしながら、東日本大震災を通して、旧来の集落が新たな枠組みで編成されようとしている今、旧集落単位での調査は困難な状況にある。よって、現時点で捉えられる集落と女性との関係を、断片的な語りにはなるが、それをもとにして捉えてみようとしたのが本研究のきっかけであった。その意味で、十分な分析にはなっていないかもしれないが、震災前と震災後の女性と集落との関係を捉える際に、貴重なデータとなると考えている。先に示した暫定的な結論をもとに、今後、村落ごとの分析にもつなげたい。

参考文献

- 江馬成也, 1994, 『子どもの民俗社会学』 南窓社.
- 城陽市歴史民俗博物館, 1995, 『城陽市民俗調査報告書第一集—ムラのしくみ・なりわい・いのり—』
- 北上町, 2005, 『北上町史 自然生活編』
- 黒田暁, 2010, 「半栽培から引き出される地域資源管理の持続性」『サステナビリティ研究』 創刊号: 163-177.
- 宮内泰介 編, 2009, 『半栽培の環境社会学—これからの人と自然』 昭和堂.
- 桜井徳太郎, 1995, 『結衆の原点—共同体の崩壊と再生』 弘文堂.
- 桜井徳太郎, 1966, 『講集団成立過程の研究』 吉川弘文館.
- 竹内利美, 1983, 『みちのくの村むら』 東北大学教育学部附属大学教育開発センター
- 武中桂, 2008, 「自然環境の変化と場所の記憶—宮城県北上町大沼の干拓に関する環境

社会学的研究』『北海道大学大学院文学研究科研究論集』(7):299-320.

*なお本稿は、ニッセイ財団環境問題助成研究（学際的総合研究）「生業の創出を核とした地域社会のレジリエンス（回復力）を形成する一宮城県石巻市北上町（橋浦地区ならびに十三浜地区）の被災経験から」（平成24～25年度）として研究助成を受けて行った調査・活動の成果にもとづくものである。